

第17回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン オラトリオ《ヨシュア》全曲公演
演奏評

『音楽の友』2020年3月号 那須田務氏

第17回ヘンデル・フェス
ティバル・ジャパン
ヘンデル《ヨシュア》

1月25日・浜離宮朝日ホール●三澤
寿喜(指揮)、キャンノズ・コンサー
ト室内合唱団&管弦楽団、辻裕久
(T)、広瀬奈緒(S)、波多野陸美
(Ms)、牧野正人(Bs)、他

ヘンデルの演奏機会の少ない作品を原則としてオリジナル編成とノーカット版、オリジナル楽器による演奏で紹介しているヘンデル・フェスティバル・ジャパンが、作曲家晩年のオラトリオ《ヨシュア》(全3幕)を取り上げた。演奏に先立ち昨年逝去したヴァイオリニスト・渡邊さとみ氏を追悼して《キャロライン王妃のための葬送のアンセム》導入曲が粛々と演奏。そのまま続けて本編が始まった。冒頭のイスラエル人たちの合唱はきびきびとしたテンポで勇ましい。総じて合唱が音楽的であると同時に力に溢れて秀逸。ソリストはお馴染みの面々で役柄に適切に表現が、カレブの牧野を除いて表現がもっと前に出るといい。とはいえ、第1幕第3場のオトニエルの波多野とその恋人アクサ役の広瀬の二重唱や第3幕フィナーレの広瀬の技巧的なアリア、牧野の《ママレの豊稔の野》において、など感銘深い場面も。オーケストラは統制が取れていて、和声や情感のちよつとした変化が鮮やかに示される。全体的に一つひとつの音楽的な事象を丁寧に紡ぎつつ、よく整理された表現で劇的な展開が明快。表彰式の曲でお馴染みの《見よ、凱旋の勇者が到来する》などもあつて公演時間の長さを感じさせず、長時間の上演時間があつという間に感じられた。

●那須田務